
怪獣対魔法少女リリカルなのは&ウルトラマンゼロ

亀7

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪獣対魔法少女リリカルなのは&ウルトラマンゼロ

【Zコード】

Z5080V

【作者名】

亀7

【あらすじ】

怪獣バスターズの世界で、ギガバトルナイザーを手に入れた（作つた）怪が今度はウルトラマンゼロと魔法少女リリカルなのはStS後の混ざった世界に行きます。

設定（前書き）

設定です。

設定

怪獣バスターズの世界で、ギガバトルナイザーを手に入れた怪が今度はミッドチルダに行きます。今度は、ウルトラマンも出ます。一応、怪は敵側です。

設定は、

名前 怪

年齢 20

能力 ウルトラマンに出てきた怪獣の能力と姿。（スペシウム石を取り込んだ為に光の力も手に入れた。）

容姿 普通

服装 NARUTOの世界から着ている暁のコート

武器 ギガバトルナイザー

世界は、NARUTO、怪獣バスターズの順番で移動している。弱点は、ウルトラマンの光の力もスペシウム石を取り込んでからは効かなくなってしまった。

設定（後書き）

これから、雑な駄文を書いていきます。

着いたのか・・・? (前書き)

これです。

着いたのか・・・?

暁のコートを着てギガバトルナイザーをつた男、怪は異空間を移動していた。

そして、

「・・・また穴か。」

NARUTOの世界から移動した時も有つたが・・・。

「まあ、良いか。」

恐らく、

「今度は、暴れられるな。」

そして、怪は穴に入つていった。

そして、

「辺りは、森か・・・。」

だが、

「前の世界では無いな。」

植物が、怪獣バスターの世界の木々じや無い。

「どちらかといふと、地球か?」

だが、

「近くに、怪獣のエネルギーも感じるな・・・。」
しかも、

「光の力も感じる。」

恐らく、ウルトラマンが戦闘しているのだろう。
「見させてもらおうか。」

ここが、何の世界か。

そして、怪は姿を透明にしてエネルギーの感じる方へ向かった。

そして、

「ジユワア！」

「グガアア！」

ウルトラマンゼロヒグドンが戦っていた。

それに、

「ディバインバスター！」

茶髪の白いコスプレ？をした女性が砲撃をしていた。

そして、他にもコスプレ？をした女性がグドンに攻撃していた。

「・・・ここは、魔法少女リリカルなのはS t S（年齢的に）の世界にウルトラマンゼロが存在する世界か。」

だが、

「グドンには、魔法少女？の攻撃は余り効いて無いぞ・・・。」
まあ、ゼロの攻撃は効いているが・・・。

そういうや、リミッターを付けてるんだっけなあ。

「解除したらグドンは・・・いや、もう解除しているのか？」
この状況で、解除しない筈が普通は無いか・・・。

「おや？」

「グガアア・・・。」

グドンが、ゼロに切り刻まれた。

ドスーン

グドンは倒れ、

ドガーン

「爆発・・・するのか？」

まあ、それは良いか。

「おや、変身を解いたら・・・はつ？」

おいおい、魔法少女？には知られているのか。

「つて、うん？」

あの顔は・・・。

「トウマだと・・・？」

NARUTOの世界・・・いや。

「霧園氣は、どちらかといふとナルトに近いな・・・。
平行世界のトウマ・・・。」

「それが、妥当だろ？」

まあ、

「今は、関係無いか。」

近くには町・・・いや、

「あれは都市だな。しかも、見た目が地球の物では無いな。
となると、

「ミッドルダ・・・だったか？」

「二次創作でしか知らないぞ。」

「取り敢えず、ここから離れて寝床・・・アジトでも作るか。」

「そいやジエイル・スカリエッティは、

「まあ、どうでも良いか。」

「多分、捕まっているんじゃないかな?」

「二次創作じゃあ、よくガジェットってメカが居た筈だからな。」

まあ、

「アジトを作つて、」

暴れるか。

そして、怪は取り敢えず都市の方へ飛んで行った。

一方、

「あれ?」

リインフォース?が気づいた。

「どうしたの?」

シャマルが聞いた。

「今、何か変な反応が・・・。」

「・・・何も無いで。」

ハ神はやてが答えた。

「あれ、変ですねえ?」

「・・・取り敢えず、なのはちゃん達にも云々ておこうか。あそこから近いしな。」

気づかれ無かつた・・・まだね。

着いたのか・・・? (後書き)
(あ書き)

こんな物です。

アンダーグラウンド。（複数形）

これは？

アンダーグラウンド

れて、

「透明にして、姿を見えなこよつて入つてみたが、」

シーン

活気が、全然無いな。

取り敢えず盗み聞きしてみるか。

近くの店で、

「はあ、また怪獣が出て来てしまつたな。」

「ああ、ウルトラマンが退治してくれても恐がつて密が来ねえ。」

「一年前に管理局が、襲撃されてから半年後ぐらいから密が出て

きたよな。」

「やいや、その時からだつたけなあ。」

「その時ぐらいじゃないか?」

「「はあ。」」

で、

「ゆりかご事件から半年後に怪獣が出てきた。」

原作が、終わってすぐに出でてきたって事か・・・。

「となると、」

これから、二つの世界が混ざり合へてくるって事が。

「だが、」

俺も暴れるだ。

「まあ、まずはアジトを作るか。」

でも、

「その前に、地下のエネルギー反応を見てみるか。」

いや、何か小型の怪獣と星人？みたいな反応がするんだが・・・。

「アンダーグラウンドか？」

二次創作ではテロリストが居るって話だったが、

「完全に、怪獣の反応が有るんだが。」

ああ、そういうや忘れていたがギガバトルナイザーが反応しているんだぞ。

ついでに気配で・・・。

「まあ、行つてみるか。」

テレポーテーションで地下へ、

で、

ガヤガヤ

「何だ？この人の多さは・・・。」

いやでも、人の姿だが気配は確実に人じや無いぞ。
しかも何か商売しているんだが、

「ええつと、これは！？」

おいおい、

「これは、カプセルに入れているが、」

怪獣じやないか・・・。

「おつ、あんたこれに興味が有るのか？」
店の店主？が声をかけて来た。

「ああ・・・もしかして、」

カプセルを指差した。

「ああ、圧縮冷凍保存したムルチだが？」
やつぱり、この魚みたいな奴がムルチか・・・。

「なあ、ここつていつから出来たんだ?」

「ああ、ここは元々地球人のテロリストが捨てたのをそのまま使えるようにしたのさ。」

「そりか・・・この1匹、100グラムつてのは?」

「ああ、ここじゃあ鉱石での物々交換だ。」

「鉱石つて、」

「ああ、鉱石の方がいろいろと都合が良いんだ。」

「ちなみに、鉱石つてのは?」

「まあ、鉱石の物によつて変わるつて事だ。グラムもな。」

「そりか、大体高い怪獣つてどんな奴だ?」

「まあ、高いのだとバット星人が養殖したゼットンだがありや天然物よりかは全然弱いなあ。」

「なんとなく分かるなあ、他には?」

「他は、まあバードンとかのウルトラマンを倒した怪獣達さ。」

「つて事は、天然物のゼットンは?」

「いや、ありやまず捕獲するのが難しいからあまり出回つて無いな。」

「そりかい・・・もうしかして、地上で暴れている怪獣は?」

「ありやあ天然物も居れば、ここから買つていたのも居るんじやないか?」

「ふうん。」

「で、あんたはお氣に入りの奴を見つけたか?」

「ううん」

「どうじよつ?」

アンダーグラウンド。（後書き）

さくらみつ

ゲットだぜー!? (前書き)

まあ、リクエストで。。。

ゲットだぜ！？

うん。

「全部でマルチ、ギルマルチ、サラマンドラ、パズズ、コッヴの中からねえ。」

「もう決まったか？」

どれもなあ。

あつ、そういうや、

「店主？鉱石つて、この（余った）マグネットで良いか？」

ジヤラ

持つていたマグネットを店主？に見せた。

「！？ええ、少しで十分です。」

店主？は、出した中から（拳半分の）マグネットを取った。しかも、口調が変わっているし・・・。

「良いのか、それだけで？」

量的に少ないと思うが？

「いえ、この量で十分です！！」

「そうかい？」

そんなに貴重か？

実は、怪が持つている鉱石は全て貴重な物ばかりだった。

「で、良いのが見つかりましたか？」

「うん、それがねえ・・・うん？」

何か、奥のカプセルの中に変に白いコッヴが居るな？

店主？が、それに気づいた。

「ああ、それは死にかけで売り物にならないコッヴ？です。」

「あの（ガイアで）完全体になれなかつたコッヴ？か？」

「ええ、そうです。」

「・・・よし。」

「！」のコッヴ？をくれ。」

「はあ？」

「鉱石は、受け取っているんだから勝手に持つて行くぞ。」

そうして、コッヴ？の入ったカプセルを持ってテレポーテーションで地上に出た。

後に、店主？は得した。と思うかもしれないがそれは間違いだ。何故なら、怪はそのコッヴ？を強化しようと思つたからだ。

最悪な強さに・・・。

まあ、リクエストにも有つたのだけれどね・・・。

さて、地上へ出た怪は、

「この伸縮自在のギガバトルナイザーにコッヴ？を入れてつヒ。うん？短くできるよ。」

このギガバトルナイザーは・・・。

で、暁のコートの懷に入れて田立た無いようにしたのを。いや、ベリアルの持ち物だから持つていたら田立つてしまつが。いろいろと・・・。

「さて、アジトまだじようかなあ？」

次に、どこ探そうか・・・。

「また、洞窟を作らないといけないのか？」

まあ、どうでも良いけど。

「さて、どうかの山に行くか。
テレビトークショントレーニングで移動。」

で、

「探しても、誰にも見つかって無い洞窟なんか見つからんか・・・。」

「まあ、こんな人が多い地域だつたら当たり前か。」

「有つたとしても、怪獣とかの巣の入口に繋がっているかもしけんなあ。」

確実にだらうけど・・・。

「まあ、あのコッヴ？は俺が送つてている（いろいろな）エネルギーでどんどんパワー増してるなあ。」

そう、いろいろなエネルギーを・・・。

ん？

「なんか、近くで怪獣のエネルギーの反応するな。」
まあ、行つてみるか。

テレビトークショントレーニング。

で、

「ギヤアアアー！！」

サドラーが居ました。

「なんか、地底怪獣ばっかだなあ。」

まあ、天然物か・・・。

「取り敢えず、コッヴ？行け！」

ギガバトルナイザーから光が出て固まり、
コッヴ？になつた。

だけど、

「グギヤアアアー！！」

色は白い・・・だが、パワーはさつきまで死にかけていたコッヴ？
では無く完全にコッヴになつたコッヴ？が其処に居た。

「サドラーに、向かつて光弾を出して。」

ビィーン

そして、コッヴはサドラーに向かつて光弾を出した。

「ギヤアアアアア・・・。」

ドスーン

サドラーは倒れた。

「瞬殺かよ！？」

・・・まあ、このまま、

「ギガバトルナイザーに入れてつと。」

サドラーが、光になつてギガバトルナイザーに吸い込まれた。

「よし、早く逃げようつと。」

絶対、魔法少女？とかくるだろうじ。

そして、魔法少女？達は怪獣が居ない事に混乱していた。

近くの山で、

「コッヴ？は、色が白いがパワーは完全にアップしているなあ。
サドラも、ゲットできたし。

なんか、ポケモンみたいだなあ。

「まあ、どんどん戦力増強しよう！」

本家ベリアルみたいに・・・。

ゲットだせ！？（後書き）

まあ、無双っす。

捕獲しています。（前書き）

これが、当分は続くかなあ？

七
九

「忘れる所だつた。」

サドラーが、群れで行動している事を・・・

たかひ

残ったサトニーを捕まえに来
数は・・・5匹ぐらいか?

ふん！

体から力強を無差別連射で出し力

『アリスの冒險』

ドスーン

卷之二

11

「ギガバトルナイザーは吸収」と
サドラー達は、光になつてギガバトルナイザーに吸い込まれた。

「次は・・・アジトを作らなーと。」

忘れてた。

にして
も、

「このギガバトルナイザーには、どのぐらい怪獣が入るんだ？」

映画でも確実に超えてたし。。。

「取り敢えず、アジトを作るか。」

テレボーテーションで今度は別の山へ

で、

「まあ、ここも・・・。」

「グガアアア！！」

今度は火山地帯に来たが、

「今度は、ゴルザかよ！？」

でも、

「ウルトラ兄弟必殺光線！！」

ビィーン

ドガ

「グガア・ア・。」

ドス

ゴルザは、倒れた。

で、

「はい、吸收。」

ゴルザは、光になつてギガバトルナイザーに吸い込まれた。

これで、終わり・・・うん？

まだ、居るのか？

「グンアアア！！」

今度は、ザンボラーかよ・・・。

でも、

「ウルトラ兄弟必殺光線！」

ビィーン

ゴロン

ザンボラーは転がった。

「つて、避けたあ！？」

でも、

「連續光彈追尾型。」

連續で光弾を出して、その光弾がザンボラーの体に取り囲むように

当たつた。

ドガガ

ドスン

ザンボラーは倒れた。

で、

「吸収つと。」

で、

あの後に、ゴルザが3匹、ゴルザ？が1匹、ザンボラーは2匹、バードンを2匹を捕まえた。

「正直、バードンは飛んでいるから光弾をぶつけるのが難しかったな。」

まあ、なんとか捕まえられたけど・・・。

「早く次の所に行こう。」

アジトは、後にしようつと。

魔法少女？達は怪獣の反応が現れたり、消えたりするのが繰り返し起きて対応に遅れていた。

捕獲しています。（後書き）

雑です。

省略 (前書き)

前の続文は、省略しました。

前回の話から何カ月も経つて宇宙で、

「まあ、このぐらいで全部だろう。」

1000匹は、確実に越えているな・・・同じ奴も含めて。
え? 何で省略したかつて?

「ほほ、同じ事ばっかりだから・・・それだけ。」

あの文を延々と読みたいか?

・・・取り敢えず怪獣達は、スペースビースト（探しでも居なかつた）以外のボス系統の怪獣もほほ全部捕まえたよ。
まあ、宇宙とか飛んで行つたりして探したり海を潜つたりして完全の状態の邪神を捕まえたりしたなあ。

「難しかつたけど捕まえた。究極超獣も、破滅根源天使も・・・。

まあ、流石に怪獣バスターズのオリジナル怪獣は居なかつたけど。ボス系統の奴は、巨大化したりして勝つたよ。

まあ、戻るのに苦労したけど（一応、大きさは無限大まで巨大化で

きる）・・・。

「そういう、ヤプール人は居なかつたなあ。」

超獣に憑依している筈だと思ったけど・・・。

「まあ、良いか。」

どうかで、超獣の体で行動しているだろう。

「さて、ミッドチルダに戻るか。」

アジトは、作つて無いな。

怪獣を捕獲していたから・・・。

だから、全然戻つて行動していないからなんか起きてるだろう。

「じゃあ。」

短くしたギガバトルナイザーを持つて、
いざ、テレポーテーションでミッドチルダへ。

で、

「えつ？ ヤプール人がミッドチルダに攻めて來たけど、ゼロに負けた！？」

久しぶりに、アンダーグラウンドに行つたら店主？が言った。

「ああ、あんたが居ない間に究極超獣やら改造した怪獣を連れてきて暴れただがゼロやウルトラ兄弟に魂ごと粉々にされたよ。まあ、究極超獣の方はどうかへ逃げたらしいが・・・。」

「ああ、だからあんなにおとなしかったのか・・・。」

「で、今は他の奴等が弱つたゼロを倒そうとしたり侵略に精を出しているが。」

だから、他の奴等は殺氣立つているのか・・・。

「まあ、俺達怪獣バイヤーには良い儲け話さ・・・。」

怪獣バイヤー・・・ここに居る怪獣を売つてている星人の事。まあ、見つかったら不味い奴等って事。

ちなみに、店主？はメイツ星人のバイヤーだと。

「で、あんたは、今まで何処に行つてたんだい？いきなり居なくなつて、他の奴等（星人とか）に殺されたと思ったぞ。」
いや、怪獣を捕まえてました。

「まあ、旅行していたりしてな。・・・何で、俺の事を覚えてたんだ？」

「あんな、良い鉱石は見たことが無い・・・それだけだ。
良い金づるつて事ね。」

「そつか・・・。そういうや、他の奴等が侵略とかしていりつて言ったけど？」

「全員が、ゼロに殺られたりして失敗しているよ。まあ、俺達にとっては有難いけどな。」

「だらうな。」

まあ、尾獣を集めて戦争で商売しようとした暁の元メンバーだから分かるけど・・・。

「で、あんた久しぶりに買うのか？」

「まあ、どんなのが居るかでね。」

他は見てきたけど・・・。

なんか、じこつていろいろ統一が無いから気になるなあ。
店主？・・・店主で良いや。

が、見せてきたのは、

「今回は・・・ヤプール人の体の欠片から生まれた超獣だ！」

と言つて店主は、いくつかのカプセルを見せた。

「また、どうやって・・・ああ、ヤプール人が死んだ時に飛び散つた体の欠片から生まれた奴か。」

「そう、ゼロ達に殺られたヤプール人の欠片をウルトラマン達に気づかれ無く集めて超獣になつた奴等だ。」

よく、見つからなかつたな。

つてか、ヤプール人が負ける事をあんたは予想できたのかよ！

「でも、まあ。」

超獣も、もう全て捕まえたのだが・・・。

ん？

「・・・店主、また死にかけの奴が居るのか？」

1つだけ、痩せ細い弱った超獣が入ったカプセルを見つけた。

つて、

「これって、ジャンボキング！？」

でも、何か変？

「ああ、こいつはあまりヤプール人の細胞を付けて無くて中途半端に超獣になつたんだ。」

だから、何か変なのか・・・。

「じゃあ、このジャンボキングで。」

「・・・またか？」

ジヤラ

拳大のマグネットイトを渡した。

「！？・・・まあ、理由は聞きましたよ。」

「そういうこと、じゃあね。」

テレポーテーションで地上へ。

で、

「ギガバトルナイザーに入れてつと。」

ジャンボキングは、ギガバトルナイザーに吸い込まれた。

え？

何で、ジャンボキングを買ったのかって？

「弱い状態からの方が、エネルギーを吸収しやすいんだよ。」

ちなみにあのコッヴ？は、

「色は白いが、飛んで動けるようになった。」

いや、本当に何でいきなり飛べるようになったんだ？

しかも、音速で・・・。

他の怪獣も、いろいろと強くなつた。

・・・まあ、今は良いか。

「ジャンボキングは、どう化けるだらうなあ。」

「アジト、どうじよう・・・。」

今まで、野宿か捕獲に動いていたから忘れてた。

「つてか、何処に作ろうかな？」

・・・どつかの山で、今度こそ作りつゝ。

多分・・・。

・・・ん？

なんか近くの海に怪獣が居るな。

「見に行くか。」

テレビテーションで海へ。

・・・そういうや、本当にポケモンみたいだなあ。

省略（後書き）

次で原作のキャラクター……。

タッコンヶを捕獲。（前書き）

では。

タツコングを捕獲。

で、透明の状態で来たが、

「こいつは・・・。」

「ギヤオオオオ！」

ジャックに出てきた怪獣タツコングとタツコングに攻撃している管理局の魔導師が居た。

「こいつは、オイルを食う怪獣だから確実に誰かが呼び出したな。」
「だつて、このミッドチルダの文化的にオイルなんて使われて無いからなあ。

「まあ、捕獲すると呼び出した奴が面倒だから殺られてからギガバトルナイザーに入れようっと。」

「殺られてからなら、文句は言われないだろ。」
「管理局本部の方に向かっているのか？」

タツコングの進行方向は、本部の有る方向だった。

誰かが誘導すれば進行方向を変える事が、

「いや、無理だな。無視されてるぞ。」

タツコングの奴、魔導師の事を敵だと思つてねえな。

「つてか、本部へ攻撃するがゼロ以外は放つとけつて命令されてるのか？」

全然、見向きにされてねえぞ。

「魔導師の攻撃は、通用してねえし。」

まあ、主人公の3人がリミッター解除した攻撃だつたらケガを負うと思うが・・・。

「にしても、主人公組やゼロが出てこないなあ。」

もうしかして、タツコングに命令した奴と戦闘していく来れないのか？

「まあ、星人レベルだつたら魔法少女・・・魔導師ぐらいなら勝て

るか。」

「ゼロが、飛んで来た。」

そして、そのままタツコングにキックした。

「ゼロの状態で来たつて事は、」

戦闘していたな。

「星人の方は、負けたみたいだが・・・。」

さて、

「タツコングが、負けるまで待ちますか。」

そうして、戦いを見物した。

で、

「また、切り刻まれてるな。」

まあ、

「吸収つと。」

タッコングは、光になりギガバトルナイザーに吸い込まれた。で、

「ウルトラ兄弟必殺光線！」

ゼロの顔に向かつて打ち出した。

「グワア！？」

おっ、膝を着いた。

「トウマ君！？」

ん？・・・高町なのはにフェイトか。

あいつらにも、

「ウルトラ兄弟必殺光線！」

「きやあああ！！」

即座に出したシールド？を突き破つて、2人に光線が当たった。

そして、そのままゼロの方へ飛ばされた。

まあ、ゼロがそれを抑えたけど・・・。

では、

テレポーテーションで逃げるつと。

そして山で、

「アジトを作らう」と。

怪は、アジトを作らうとしていた。

アンダーグラウンドや時空管理局では、ゼロに攻撃した見えない敵（怪）の事を調べる奴が出てきた。
まあ、秘密だけどね・・・。

タッコンヶを捕獲。 (後書き)

次は、どうしよう。

アジトを作つて・・・。(前書き)

最後は、いきなり！？です。

アジトを作つて・・・。

さて、

「適当に、山まで来たが。」

近くで、やつぱり怪獣の反応があるんだよなあ。

「この辺は、前に捕獲しまくったのだがなあ?」

「世界の修正力で、生まれるのか?」

「それとも、誰かが呼んでいるのか?」

まあ、どちらもありえるか・・・。

それは、後にして、

さて、田の前の山で、

「作るか、アジトを。」

で、

「できたあ!ー!」

作りは、奥の方まで長くできて途中で分かれ道のある作り、

そして、奥は広い部屋になつていて。

後は、

木を切つてきて床に敷いて、

「布団とかは・・・まあ、良いか。」

どうでも。

そして、

「ここへ来る途中に罠を・・・何にしてみりや。」

入り口に戻るよう指示するのと、

「悪夢を見せるよう指示するか。」

悪夢は、まあこりこりだ。

で、

「これで、良いな。」

まあ、完全に迷路だけど・・・。

覚えるのは、まあできるかな?

「俺は、覚える以前にテレビポーテーションで移動できるけどな。」

わて、

「アンダーグラウンドへ、行くか。」

で、店長に、

「あのタツコングって、やつぱりアンダーグラウンドの奴か？」

「ああ、確かに前に別の店で売つてあつた奴だと思つわ。」

「そうか。」

当たり前……。

わて、

ここから本題だ、

「聞きたい事が、有るんだが……。」

「何だ？」

「ゼロの正体つて誰だ？」

「ああ、それは過剰戦力満載の機動六課のモロボシ・ヒカルだ。」

過剰戦力は、まあ分かる。

だけど、

「ヒカル？」

トウマ本人では無いのか……。

「ああ、モロボシ・ダン……セブンの息子さ。」

「へえ。で、出身世界は？」

「知つてゐる限りは、地球の生まれで白い魔王高町なのは、金色の夜叉フュイト・T・ハラオワン、関西タヌキの八神はやての幼馴染みだ。」

「物騒な……うん？タヌキつて？」

「ああ、本来は夜天の王だがな。どちらかといつと、関西弁を喋るある意味食えないタヌキさ。」

まあ、分かるなあ。

もう一つの遊戯王の小説では、最近は出てきていいけど。

「で、何でそんな事を？まさか、殺るのか？」

「いや、正体が知りたかっただけ。」

「・・・そうか。」

「疑つてゐるが違うよ・・・。」

「もう1つ聞きたいのは、」

「聞きたいのは?」

「騎士カリムの予言さ。」

「ああ、あのお嬢様か。」

「お嬢様?」

「ああ、宗教を人の役に立てると思つてゐるが、」

「が?」

「周りの住人の、宗教に對しての印象を知らないお嬢様さ。宗教・・・ねえ。

はつきり言つて、危ない集団としか思えないなあ。

特に、NARUTOの飛段のは。

「で、予言だつけな。」

「ああ、それが気になるんだ。」

「確か、ヤプール人が攻めてくる事を予言してゐたな。」

「おいおい、

「すごいな。」

「で、次の予言は近く出でてくるらしきだ。」

「まだなのか?」

「ああ、一応知つてゐる限りではな。」

「知りすぎじやないか?」

「いろいろと。」

「まあ、諜報の奴等の情報だ。」

「諜報ね。」

「まあ、ある意味納得できる。」

「他にも、いろいろ有るな・・・絶対に。」

「まあ、

「これからが本題だ。」

「何だ？」

「暗殺を請け負ってくれる奴に心当たり有るか？」

「暗殺ね・・・。誰を、暗殺するんだ？」

「ヴェロッサ・アコース。」

騎士カリムの義理の弟だ。

アジトを作つて・・・。（後書き）

まあ、ここからですかね、

今回は・・・。

で、

「ヴェロッサ・アコース？」

「ああ、捜査官のヴェロッサ・アコースだ。」

「レアスキルを2つ持ち、騎士カリムの義理の弟のか？」

「ああ。」

「・・・さしづめ、レアスキルか？」

「脳内検査、無限の獵犬・・・分かるだりう？」

「まあな。」

脳内検査は、相手の記憶を検査する能力。

無限の獵犬は、魔力で作った無限の数の犬で検査をする能力。

「で、殺つてくれる奴は居るのか？」

「まあ、機動六課のメンバーより楽かもしけんが・・・。」

「実力が有るのだりう？」

「ああ。」

魔力ランクは、原作では不明だがここでは魔力ランクAAだと分かった。

「別に居ないのなら良いんだが。」

「まあ、物の次第によつちやあ殺る奴は居るかもしけんが・・・。」

ジヤラ

拳大のホムラ石を置いた。

「！？これは・・・。」

「ホムラ石だが、文句は有るのか？」

「・・・一応、聞いてみる。」

と、言って店長は店の奥に行つた。

で、

店長と5人ぐらいの男が、一緒に奥から出てきた。

「あなたが、依頼人か？」

リーダー？の男が聞いてきた。

「ああ。」

「本当に、ヴェロッサ・アコースを殺したらこの鉱石を？」
ホムラ石を指差した。

「ああ、出来るのか？」

「俺達は、人数で動くからな。」

「じゃあ、頼む。」

そして、帰ろうとした時、

「まだだ。」

男の1人が止めた。

「・・・何がだ？」

「あなたの名前は？」

「それは、依頼が達成できてからだ。」

「・・・なぜだ？」

「ヴェロッサ・アコースのレアスキルだ。」

「・・・俺達が、失敗すると思っているのか？」

「ヴォロツサ・アースに、記憶を覗かれたら……分かるだろ？」

「……分かった。」

「じゃあな、頼むぞ。」

テレポーテーションでアジトへ。

で、
「アジトに戻つて來たが、」
多分、あいつら失敗するな。
「原作キャラが、そう簡単に殺されると思えん。」
まあ、失敗したら、
「俺が、殺すけどな。」
殺す理由は。

「脳内查察……厄介なレアスキルだな。」

ただ、それだけだ。

「大体、何で真面目なやり方で機動六課のメンバーを殺すんだ？」

まず、他の殺されると思って無い奴を殺した方が良いだろう。

「ヴェロッサ・アースを殺したら、いろいろな所に影響が有るか

らな。」

ヴェロッサ・アースは、騎士カリムの義理の弟で、
「ハ神はやてに妹の様に接していた。」

「まあ、」

失敗するだらうな。

「まあ、俺は、」

適当に暴れるか。

テレポートーションで、ミッドチルダ近くの別の山の方へ。

で、

さて、

「どれを暴れさせようか？」

ギガバトルナイザーに入つて いる怪獣は、

「確実に10000?ぐらいいるか?」

シビトゾイガーとかを捕獲し過ぎたなあ。

「まあ、今回は、」

「どうを暴れさせようか?」

何を出そうか？

ゴルガ対ゼロ・・・一応。（前書き）

今日は、

「ゴルザ対ゼロ・・・一応。

さてと、

「どいにしようかな？」

まあ、全部強くなつてるしなあ。

「ジャンボキング、タツコングはダメだしなあ。」

今は、別の奴を出したいなあ。

・・・うん？

「アジトを作つていた時の怪獣の反応か・・・。」

・・・捕獲するか。

「透明にしてつと。」

反応の有る方へ、

で、

「ギャオオオオオ！――」

こいつは、

「デットン……だよな？」

しかも、5匹も……。

「サドラーが、居なくなつたから繩張りを広げたのか？」
まあ、

「連続光弾！！」

ドガガン

『ギャオ……』

ドスーン

デットンは、倒れた。

まあ、

「吸収つと。」

5匹のデットンが、ギガバトルナイザーに吸い込まれた。
で、

「首都クラナガンの近くの森辺りへ、」
テレポーテーション。

で、

「まあ、こいつで良いか。行け、ゴルザ！」

ギガバトルナイザーから光が出てきて、
形になつて、

「ギヤアオオオ！！」

ゴルザになつた。

「まあ、クラナガンの方へ行け！」

ドスン、ドスン、

ゴルザは、クラナガンの方へ向かつた。

で、クラナガン近くで、

「魔導師か・・・。」

時空管理局の魔導師が、ゴルザに攻撃してきた。

でも、

「ギヤオ？」

全然、効いていないぞ。

「まあ、本局・・・海に戦力が集中しているから当たり前か。」

知つてゐるか？

本部・・・陸の魔導師つて優秀な奴が居ないんだ。

しかも、人が居ないから毎年人員不足。
だから、治安も凄く悪いんだよ。

「だから、」

はつきり言つて、

「クラナガンの制圧つて簡単なんだよ。」

そういうや、

「機動六課つて、戦力がおかしいぐらい有るんだよな。」
本来は、あんなに戦力が集中するのはおかしいんだが、
「バツクに居る奴等が、支援しているからOKなんだよなあ。」

まあ、

「それは、ただ運が凄く良いだけなんだが。」

「その気になれば、

「謀略で潰せるのに・・・。」

取り敢えず、

「ゴルザ、そいつら放つておいて都市の方へ向かえ。相手にしたら、
面倒なだけだ。」

「ギヤアオオオオ！」

ゴルザが、頷いた・・・のか？

で、
「出たな、機動六課。」
出てきたのは、スターズ分隊、ライトニング分隊。
「そして、ヒカリか・・・。」
デバイスを持つているな。
「あれが、変身道具も兼ねているのかな？」
まあ、
「良いか。」
所詮、
「足止めにしかならん。」
ウルトラマンが、変身するのは、
「人の力では無理だと判断した時だ。」
まだ、その時では無いな。
「ゴルザ、そいつらも放つておいて都市の方へ向かえ！」
ドスン、ドスン

で、
「全然、効いていないぞ。」
まあ、
「体長クラスで、蚊が刺さった程度か？」
後、ヒカリも。

「おっ、体長達がでかい砲撃が・・・まあまあ効いているのか？」
いや、

「全然か。」

普通の個体よりは強いからな。

まあ、

「まだ、完全にパワーアップした怪獣では無いから別に良いけどな。」

「実は、あいつは最近捕獲した怪獣、

「まだ、少ししかエネルギーをあげてないんだよ。」
だから、

「ゴルザを出したのは、」

ゼロの力試しだ。

「おっ、ゼロが出たか・・・。」

さて、

「どのぐらいかな？」

まず、ゼロがゴルザの間合いを取つて、

「でもゴルザ、ゼロに向かつて火炎弾！」

ゴルザが、ゼロに向かつて火炎弾を放つた。

それを、ゼロは避けた。

でも、

「ゴルザ、連続で火炎弾！」

ゴルザが、何発も連続で火炎弾を放つた。

そして、

ドゴーン

避けそこねて、火炎弾をゼロに当たつた。

「グワアアアア！？」

ゼロが、倒れた。

「さて、ゼロの強さは接近戦には強いが遠距離戦には、」
「ジユワア！？」

ゼロが、スラッガーを飛ばした。

「ゴルザ、受け止める！！」

そして、

「ギャオ！！」

スラッガーを、ゴルザは受け止めた。

「そして、投げ返せ！！！」

ゴルザが、ゼロに向かつてスラッガーを投げ返した。

だが、

「ジユワア！！」

スラッガーを、ゼロは受け止めて剣？みたいにした。

「ゴルザ、ゼロに向かつて火炎弾！！」

ゴルザが、ゼロに向かつて火炎弾を放つた。

けど、

「弾いた！？」

ゼロが、剣？になつたスラッガーで火炎弾を弾いた。

・・・もづ、

「そろそろかな？戻れ、ゴルザ！」

ゴルザが、光になつてギガバトルナイザーに戻つた。

そして、

「オラアー！！」

ゼロに向かつて光弾を放つた。

それを、ゼロは弾こうとしたが、

ドガン

「グワアアアー！？」

弾きれず吹つ飛ばされた。

で、

「機動六課のお前らもだ。」

連續で光弾を放つた。

けど、

「・・・ふん、避けたか。」

ギリギリ、魔導師達は避けた。

まあ、
「良いか。」

テレポーテーションで、アジトへ戻った。

で、

「ゼロは、接近戦には強いが遠距離戦には・・・あまり対応できてい
無いな。」

まあ、

「多分、対応していくな。」

次は・・・。

機動六課では、見えない敵の対策を講じていた。
アンダーグラウンドでは、見えない奴（怪）を雇おうとする動きが
始まつた。

ゴルザ対ゼロ・・・一応。（後書き）

まあ、ヘタにゼロの剣をゴルザで受け止める事ができるのかが不安なので途中で引き上げさせました。

次はベルカ自治区。（前書き）

いつも事です。

次はベルカ自治団。

前の話から、1週間後

『本局捜査部所属捜査官のヴェロッサ・アコース死亡。』

クラナガンの、ニュースでの報道が有った。

で、アンダーグラウンドで、

「まさか、こんなに早く殺れるとわな・・・。」

「俺達も、こんなに早く殺れると思つて無かつたぜ。」

リーダーの男が言つた。

「まあ、良いか。報酬のホムラ石だ。」

ジヤラ

ホムラ石を出した。

「ああ、もしまだ雇うなら頼むぜ。」

リーダーの男は、ホムラ石を受けたつた。

「ああ、分かつた。」

多分、もう無いと思うが・・・。

「で、あんたの名前は?」

「そうだったな。俺の名前は、怪だ。」

「

「怪・・・か。」

「ああ、誰にも言わないでくれよ。」

「分かつてゐる。」

「じゃあな。

テレホー テー シミンでアシトベ

で、今度は、

「ベルカ自治区へ来たが、」
もちろん、透明の状態だけど、
「結界が有るなあ。」

まあ、

「怪獣で、物理攻撃したら脆いだろうな。」

だけど、

「あんまり、人気無いな。」

いや、周りの住人が関わりたく無いって噂を聞いた事が有ったんだ。
「まあ、この聖王つていうのだけな？聖王は、他の世界を統治したつて事でそれを敬えつて宗教だけ。・・・はつきり言って、他の世界にとつて迷惑のなんでも無いな。」

もしかすると、聖王が他の世界に介入したせいで起きた戦争が有つたかもしれないのに、

「そんな奴を敬えつて。」

まあ、

「この辺の住人は、距離を置いてやつているけどな。」

教会の恩恵（焼き出しボランティアとか）を、受けて生きてる人も居るからしようがないけど。

「でも、アンダーグラウンドでのベルカの騎士の噂は戦いをスポーツとか考えていて大勢で殺そうとしたら、卑怯だって言つたらしいな。」

いや、殺しあう戦いで卑怯なんて無いぞ。

「NARUTOの世界なんてよく有る事だぞ。」

賞金首を狩る時なんか1人対多人数がよく有る事なんだから、

「しかも、こここの過激派はテロ行為をやつているつて噂が有るしなあ。」

まあ、

「宗教だから、有るかもしけんからなあ。」

今の騎士のカリムは、大丈夫だけど御嬢様で周りをよく知らないらしいなあ。

まあ、

「今は、ヴェロッサ・アコースが死んで悲しんでいるだろ?」
さて、

「今度は、どいつを暴れさせよ?」

地下から出てきた、つて事でやれる怪獣が良いな。

次はベルカ自治区。（後書き）

どうじょうかな？

ロストロギア泥棒。（前書き）

こうなりました。

ロストロギア泥棒。

で、

「じゃあ、行けアントラー！」

ギガバトルナイザーから、光が出てきてそのまま地下に潜つて行き、
土の中から、

「ンガアアアオオオ！」

アントラーが出てきた。

「さてど、アントラーそのまま磁場を出せー。」

「ンガアオ！」

・・・傾いたのか？

まあ、良いや。

「さて、教会の中にはロストロギアが有るんだつけなあ。」

まあ、見てみますか。

で、

「まあ、取り敢えずなんかヤバそうな物が有ったからそれを取つて
来たけど」

量が多くて、体の中に入れたけど。
うん？一応、体の中はかなりの量が入るぐらい広い空間になつて
るんだ。

さて、

「アントラーは・・・磁場を出しているからデバイスだつて？が使
えないようだから魔導師は苦戦しているな。」

まあ、攻撃出来ても強化した怪獣だから意味は無いな。

それに、

「体は、かなり硬いだろ？なあ。」

ゼロのスラッガーも、通す事は出来ないな。

「さて、ゼロは・・・来てないのか？」

あれ？

「来ないのか？」

・・・磁場の影響で、遅くなつてているのか？

「まあ、良いや。」

早く、戻ろう。

「戻れ、アントラー！」

アントラーは、光になつてギガバトルナイザーに入つていった。

「さて、帰るか。」

「そこに、居るのは誰だ！」

うん？体は透明の状態だが、
声がした方に顔を向けたら、
水色の髪の毛の女の子が居た。

「おいおい、お前はナンバーズのセインだな。」

「お前は、誰だ！」

「言わねえよ。」

「そう。」

「うお！？」

ギィーン

ギガバトルナイザーで、後ろから来た双剣を受け止めた。

「・・・確か、ディードだつたか。」

茶色の髪の顔の表情が、あまり変わらなそうな女の子が居た。

「・・・教会の中は何をしていた？」

「うーん、何も。」

嘘です。

「じゃあ、お前は怪獣を見たか？」

「さあ？」

「・・・どちらにしても、話は聞かせてもらおうか。」

「聞きたいが、何で姿の見えないのに俺の位置が分かるんだ？」
透明の状態なんだが、

「私の姉に、自分の姿を隠す人が居てな。」

「そういや、魔法で姿見えなくする奴が居るんだっけな。
確か、

「ナンバーズ4のクアットロだつたか？」

「・・・」

「だんまりか、

「まあ、逃げるか。」

テレポーテーションでアジトへ、

「…逃げた？」
「…そうみたい。」
「急いで、他の皆さんに知らせてよ。」
「怪は、存在を確認され始めた。」

「…」
「あいや、多分声を出した方向に攻撃していたな。」
「多分、耳が良いんだろう。」
「もしくは、慣れていたのか。」
「まあ、磁場の影響でかなり体の動きが変ったけど。」

戦闘機人だから、磁場の影響を受けて、

「後で、倒れるだろう。」

まあ、

教会のロストロゴギアは、手に入れた。

「何をしようかな？」

ロストロギア泥棒。（後書き）

さうじよひへ

暇潰しだ、お前り脱獄やせるか。（前書き）

性格が・・・。

暇潰しで、お前り脱獄させるか。

で、

「このロストロギアは、どうしようかな？」

・・・、

「アンダーグラウンドの店長に頼んで買に取つて貰おうかな？」

でも、

「このロストロギアって、教会の中に有つた物だからなあ。」

確實に、

「田立つよなあ。」

セイン達には、姿を見られて無いから良いけど、

「最近のアンダーグラウンドは、俺を雇つて侵略しようとする奴も居るからなあ」

・・・、

「うへん、」

正直、盗んだのは暇潰しにやつてみようと思つたからだし、

「どうしようか、これら。」

アジトの中は、少し広めに増築？したから場所はあまりとらないけど。

「これって、危ない物ばかりだからなあ。」

まあ、

「このまま、取り込むのも良いけどなあ。」

それで、もし、

「魔法を使えるようになつたらなあ。」

それつて、

「リンカー・コアが、有るつて事で、」

リンカー・コアが、攻撃されるといつ弱点とか増えたら嫌だなあ。

「まあ、魔法はウルトラマンに出てきた怪人の使えるけどなあ。」

つてか、

「この世界の魔法は、超科学っていう物でファンタジーの魔法じゃ無いからな。」

あんまり、使いたくないな。

「まあ、縁が無いから良いけど。」

まあ、

「しようがない、あいつらを脱獄させるか。」

なあ、

「ナンバーズ1・3・4・7とジェイル・スカリエッティ。」

確か、

「無人世界6・9・17に投獄されているんだっけな。」

さてと、

「分身して、」

襲撃しますか。

で、

『ぐう、ぐう。』

「眠らせて連れて來たが、」

いや、眠らせ無いと拒否して出てこなかつたから。

「・・・で、そろそろ起きんかああああーーー！」

『ビクツ！？』

お、

起きて、すぐこっちを睨んだ。

「初めまして、ジエイル・スカリエッティとナンバーズ。」

「・・・君は誰だ？」

「俺の名前は、怪。それ以外は無い。」

「・・・私の娘達も、脱獄させて何か用が有るのか？」

「・・・意外と娘思いなのか？」

「まあ、強いて理由が有るのならこれだな。」「

ドーン

ロストロギアを見せた。

「・・・なぜ、教会の厳重に保管されているロストロギアを持つているんだ？」

「あれ？前に、教会に保管されているロストロギアが盗まれたってニュースを・・・ああ、監獄の中からじやあ分からんか。」「

『盗んだ！？』

全員で声を出すな！

「あの厳重な警備を、1人で君が盗んだのかい？」

「ああ、厳重って言つてもほほ壊されているからだけだな。」

ギガバトルナイザーから、光を出してベルカ自治区の映像を見せた。これつて、本当に多機能だなあ。

「・・・壊されてますわねえ。」

メガネを浸けたクアットロが言い、

「何を使つたらこうなるんだ？」

背の高いトレーレが言い、

「・・・」

クールそうなウーノは映像を見て、

「・・・」

桃色髪のセッテは・・・トーレを見ていた。
つてこっちを見ろや！

で、

「・・・これは、君が連れていた、」

「いや、別の怪獣に慣れさせた。」

「そうか。」

スカリエッティが納得した。

「で、このロストロギアを私に見せてどうするんだ？」

「まあ、いらないから使ってくれないか？」

「・・・」

「言い忘れていたが、俺が盗んだのは暇潰しにしたからだ。それ以
外は無い。」

で、時空管理局はジェイル・スカリエッティとナンバーズの脱獄に
慌ていて、

ジエイル達を、S級指名手配犯にして管理世界に指名手配した。

暇潰して、お前ら脱獄させるか。（後書き）

ジェイルとナンバーズの性格が、調べた限りでしか分からない。

意外な！？（前書き）

これは・・・。

意外な！？

「私に、これを譲つて何をさせる気だい？」

「さあね。なんか、勝手にやつてくれそつだと思つたから。」

「君は、おかしいね。」

「あんたに、言われたく無いな。」

「確かに・・・で、なぜ君はコスプレをしているんだい？」

「・・・はあ？」

「いや、だつて君の服は暁のコート、」

ヒュン！！

『ビクツ！？』

ギガバトルナイザーを、ジエイルに突き出した。

「貴様、ドクターに！！」

トーレが、睨みながら言つた。

「・・・なぜ、お前が暁を知つている？」

この世界に、NARUTOは無かつた筈だ。

「・・・君は、NARUTOという日本の漫画の話を知つているか？」

「・・・俺は出てこないだらう？」

「やはり・・・。私は、前の自分の時の記憶が有るんだ。」

「・・・まさか、

「憑依者か？」

「恐らくね。」

『・・・？』

ナンバーズは、意味が分かつて無いな。
にしても、

「・・・本当か？」

「ああ。」

それなら、

「証拠は？」

「証拠って言われても・・・。」

だろうな、

「なら、NARUTOのオチは？」

俺も、読んでは無いけど、

「私は、オチを読む前に憑依したが最後に読んだNARUTOの話では確か暁のデイダラがうちはサスケと自爆したぐらいだった筈だが・・・。」

「確かに、デイダラは自分の起爆粘土のことでサスケと自爆したが・

・・。」

まあ、
「ジエイル・スカリエッティが、管理外の日本の漫画を知っている

訳が無いか。」

という事は、

「本当に憑依者か。」

「ああ・・・信じてくれるのかい？」

「まあ、俺が知っている限りでのジエイル・スカリエッティのイメージ的に違うからな。」

「とういうと？」

「ギガバトルナイザーで突いた時に、もつと冷静に対処できると思つていたからだ。あんた、今メチャクチャ汗をかいてるからな。」

「お前、汗がダラダラ流れてるぞー！」

「・・・そんな、イメージが有るのか？」

「ああ・・・。お前、原作を知つてているだろ？？」

「・・・はあ？これって、漫画なのか？」

「おい、

「お前、もしかしてこの世界が漫画という事を知らないのか？」

「ああ、私が憑依したのは大学生の時に家で寝て起きたら憑依して
いたから。」

「それで、魔王とかに勝てると思つてたのか？」「ああ、状況的にも勝てる。」

無理だろ？。

「ちなみに、この世界の主人公は高町なのはだぞ。」「そうか・・・だから、私は負けてしまったのか？」

「ああ。」

『・・・？』

ナンバーズは・・・分からぬよな。

「まあ、この世界の事を知つているのなら魔王には勝つているからな。」

「そうか。なら、相手が主人公なら負けるのはしょうがないのか？」

「まあ、主人公が消えたらこの世界の存在意義が無くなつてしまつたからな。」

「はあ・・・私のやつた事は、意味の無い事なのか？」

「いや、反乱を抑えた主人公が敬われてるぞ。」

「私の意味は・・・それだけなのか！！」

『ビクツ！？』

ナンバーズは、びっくりしているなあ。

・・・、

「あんたに、聞くが人体実験をしていて気持ち良かつたか？」

「そんな訳が無いだろ？！確かに、私は無限の欲望だが人体実験を好きでやつている訳が無いだろ？！－－」

凄い剣幕だ・・・。

『・・・。』

ナンバーズは黙つているなあ。

「じゃあ、なぜ人体実験を？」

「娘達の為だ！！あいつらは、協力しないなら娘達を実験材料にすると言つたんだ！！」

『ドクター・・・。』

おいおい、

「嘘では・・・無いな。」

「ああ、私は神を信じ無いがこれは誓える。」

良い人だ。

だが、

「自分が、犯罪者って自覚は？」

「それは有る・・・。だが、私は・・・私は・・・うわあああああああああ！」

『ドクター！？』

ジェイルが泣いて、ナンバーズが近づいた。イケメンが、思いつきり泣いてるなあ。

「私は。」

「しつかりしてください、ドクター！..」

ウーノが言い、

「そうですよ～。私達の為に、やつた事ですから～。」

クアットロが言い、

「泣いてるドクターは、ドクターらしくありません。」

トーレが言い、

「ドクター・・・。」

セツテが言った。

「私は・・・どうしたら良いんだ？」

「うーん、それはまあ娘達を幸せするとかじゃないのか？まあ、俺は犯罪者としての自覚が有るから今までなんとかなつてているが・・・。」

暁で賞金首を狩つたり、ヴェロッサを暗殺したからなあ。

「娘達を？」

「ああ、自分の娘なんだから幸せにしたり？..」

「そうか・・・。」

「納得したか？」

「ああ、娘達を幸せにする事は親としての義務だからね。」

で、

「これから、どうするんだ？」

「どこの管理外の世界でまともな仕事に就いて、娘達を幸せにするよ。」

「そうか・・・なら、住む世界と仕事を見つけるまでここに暮らしたら？」

「・・・良いのかね？」

「まあ、最初はロストロギアでなんか問題事を起こして貰おうかと思つたけどまともな奴なら幸せにしてやりたいよ。」

「・・・ありがとう。」

「いや、ここからの人生はあんたの人生でも有るんだから娘達も自分も幸せにしないよ。」

「ああ・・・これからもよろしく。」

「よろしく。」

ガシツ

お互い握手をした。

「・・・で、このロストロギアは？」

「ああ、なんだか面倒くさくなつたから教会に返すよ。」

「そうかい・・・娘達に会つたら私の事は忘れて幸せに暮らしてくれつて伝えてくれないか？」

「分かっている。」

テレポーテーション

「俺は、自覚しているからその気は無いけど。」
「ジヨイルの奴は、親としての義務をしないとな。」
まあ、
まあ、
「俺、
まあ、
で、
「俺、
まあ、

で、「ドクター、今の話は?」
ウーノが聞いた。
「本当の事さ。私は親として君達を幸せにするよ。」
『ドクター……。』

意外な！？（後書き）

まあ、ジェイル・スカリエッティを親としての義務をやらせたいからかな？
そんな訳です。

返すけど・・・(前書き)

久しぶりかな?

返すけど・・・。

透明の状態で教会に来たが、

「さてと、見回りみたいな騎士?達は眠らせたぞ。」

ちなみに、ダイナに出てきたバオーンのいびきで眠らせた。

で、

「ここに置いてっと。」

広い部屋にロストロロギアを置いた。

でも、

「魔力の使われて無い10分の1のロストロロギアは貰つとくねど。」

魔力の有るのはいらん。

だって、

「虚数空間では、意味が無いから。」

で、アンダーグラウンドで

「次は、分身して時空管理局のロストロギアと有る施設から遺体を同時に盗むか。」

その前に鉱石を換金して、

「服と家具を買ってアジトに戻るか。」

あいつら、囚人服だし。

で、

「帰つたぞ。」

ビクッ

いや、

「驚き過ぎだろ。」

「いや、一切気配が無いから、
「びっくりしましたわ。」

そりやあそうか、

まあ、

ドサッ

家具と服を置いた。

「どこから、出てきたんだ?」

トーレが聞いた。

「それは秘密だ。で、女子達はこの服に着替えてくれ、」

で、

ズズッ

『！？』

壁に四角い穴が出来た。

「その部屋で。」

「・・・さつきまで、無かつたよな?」

「・・・ええ、トーレ姉。」

で、

「ジヨイルは、少し話だ。」

「分かつたよ。」

「私も、同席します。」

ウーノが言った。

「良いぞ。」

まだ、信用されて無いよなあ。

教会では、一部を除いてロストロギアが返つて来た事に混乱していた。

そして、民間では教会にロストロギアを保管させて大丈夫なのか？
という不満が出てきた。

が、それを教会側の重鎮が知るのはいつの事か・・・。

で、

「私に話とは？」

「まあ、自己紹介みたいな物だ。」

いろいろな説明とな。

そして、機動六課では攻撃していた見えない敵と教会でロストロゴニアを盗んだ侵入者が同一人物か疑い出した。まだ、完全には気づいていないが・・・。

返すたゞ・・・（後書き）

遺体は、あいつらです。

状況説明。(前書き)

自己紹介。

状況説明。

で、家具の椅子に座つて、

「自己紹介が、まだだつたな。憑依者？」

「そうだね。そして、私はジェイル・スカリエッティだ。」

でも、

「一応、本人では無いからな。」

「まあ、君が知つてゐる私とは違うだろうね。」

「だな。で、俺はNARUTOの世界に転生した転生者だ。このコ

ートは、晩に所属していた時のを着てゐるんだ。」

「まさか、本当にいふとは・・・。ネット小説で、読んだ事しかなかつた。」

「憑依した奴が言つ事か？」

「違ひない。」

「・・・あのう、ドクター？」

ウーノがジエイルに話かけた。

「なんだい、ウーノ？」

「先程から、憑依やら転生とは？」

「まあ、簡単に言えば私達は前世の記憶があるんだ。」

「そういう事。」

「それつて、レアスキルですか？」

「いや、」

「ただ、単に前の自分の記憶が有るだけだ」

「はあ。」

「まあ、理解できないし。

つてか、

「そんな白い目で見ないでくれ！」

「ですが、」

「とつ、取り敢えず話を、」

「ああ、そうだな。で、俺は死んだ後にテンプレで能力を貰つてNARUTOの世界に転生つてか行つた。」

「私は、気づいたらいつの間にか子どもの私に憑依していた。」

「まあ、何というかよくパニックにならなかつたな?」

「元々、この身体の持ち主が、」

「無限の欲望。」

「ああ、だからどちらかといふと興味を持つたけど、「けど?」

「下手にバレたら殺される状況だつたから。」

「まあ、良い実験サンプルだろうな。」

「まあ、調べて分かるとは思え無いけどね。」

「まあ、NARUTOではできそうな奴がいるがな。」

「オカマ?」

「ああ、あのオカマだ。」

「あの世界の科学力は、一体どうなつてゐるんだ?」

「正直、バラバラで分からん。」

「何で、監視力カメラとか有るんだ?」

「まあ、
「考へても、今はもう分からんがな。」

「まあね。でも、君はどうやつてこの世界に来たんだ?」

「ん?なんか、適当に宇宙を探したら別の世界が有るかなあつて。」

「宇宙船を作つたのかい?」

「いや、普通に飛んで、」

「「はあ?」

「2人共、意味が分からんよなあ。」

「まあ、俺の能力だ。」

「テンプレ?」

「そう、テンプレ?」

「・・・?」

ウーノは分かつてない。

「まあ、能力の方は後で説明するとして。で、宇宙に飛んで探した
が同じ所に何回も戻つて来てしまってな。」

「まあ、繫がつてたらやばいだろうね。」

「ああ。で、探していたら穴を見つけてその穴に入つて行つたら別
の世界に着いた。」

「穴？」

「まあ、ご都合主義だ。」

「そう。で、最終的にはこの世界に？」

「ああ。だが、まさかウルトラマンが居るとはねえ。」

「私も、ここがウルトラマンの世界だと思つたよ。」

「ゼロを知つているのか？」

「確かに、映画のウルトラマンじやなかつたかな？」

「ああ、そうだ。本来は、この世界には縁の無い筈なんだが、」

「だが？」

「なぜか、この魔法少女リリカルなのはStrikerSの世界に、

「魔法少女？」

「ああ。高町なのはが、主人公つて言つただろう？」

「ああ。だが、魔法少女つて、」

「もう年齢的にはアウトだがな。」

「だね。」

「「ブツ。」「

一方、

「ヘックション！」

機動六課では、魔王がくしゃみをしていた。

「で、本来はこのままヴィヴィオつて娘が次の主人公になる筈なん
だがな。」

「あの娘が？」

「ああ。で、俺が知っているのはここまでだ。」

「私達は？」

「・・・一応、更正しているナンバーズは出てた筈だが他は知らん。」

「うう。」

「うう。」

「で、本来この世界に存在しないウルトラマンゼロ・・・モロボシ・

ヒカリは、」

「ヒカリ？」

「ああ、機動六課のモロボシ・ヒカリだ。」

「まさか、ウルトラマンとはねえ。」

「前から、機動六課に居た筈だが？」

「いや、そんなに強いとは思わなかつたが。」

魔導師としては弱いのか？

まあ、

「別に良いがな。」

「でも、なぜウルトラマンが？」

そりやあ、

「クロスオーバーした世界とかじゃないの？」

「まあ、なんとなく分かるが・・・。」

そういう事。

で、

「君の能力つてのは?」

「まあ、正直珍しいぞ。」

「アニメの?」

「いや、違う。ウルトラマンに出てきた怪獣の能力と姿だ。」

「・・・はあ?」

「だから、宇宙でも生きてられたんだ。」

「まあ、分かるが・・・強いのか?」

「封印とかされなければな。」

封印は、エネルギーがいるからな。

「一応、言つがあの怪獣達は俺が連れた来たんじゃ無いからな。」

「本当に?」

「ああ。どっちかといふと元々居たらしいぞ。」

「私は、知らんのだが、」

「お前が、捕まつた後から生まれて来たんじやないの?話的にはそ

うなるぞ。」

「そうなるのかな。」

「多分な。」

で、

「俺は、好き勝手にやるだ。」

「といつと?」

「それは、」

続きます。

まあ、こんな事です。

復活しろー！

「まあ、暗殺したぞ。ヴュロッサ・アーロースを。」

「・・・はあ！？」

「！？」

まあ、驚くわな。

「まあ、理由は試したかったんだ。」

「・・・何をだい？」

「原作キャラは、どこまで世界の修正力に守つてもらえるか。」

「・・・で、結果は？」

「機動六課のメンバーは、完全に修正力に守られてるとすると八神はやての一応義兄になる奴は守つてもらえるか。まあ、守られ無かつたけど。」

「・・・私達もか？」

「まあ、悪役を生かす通りは無いだろうな。ってか、ジェイルは捨て駒になるぞ・・・多分。」

「そうなのかい？」

まあ、

「俺は、殺す気は無いぞ。興味が無いし。」

「・・・一応、信じとくよ。」

「ドクター！？」

ウーノが詰め寄った。

「まあ、俺は勝手にやるぞ。じゃあ、ちょっと行って来るぞ。」

「何処にだい？」

「まあ、残りの娘さ。」

「！？」

テレポーテーション

で、有る施設、

「情報通りだ。」

目の前には、生体ポット？みたいな物が2つ有った。

一方は、

金髪女性が入つたポット。

「まあ、美人だなあ。」

もちろん、

「裸だ。」

まあ、教会の堅物が骨抜きにされるわな。

で、

「取り込んでつと。」

で、

一方は、

「無口そうな男性が入つたポット。」

「隣の男のもつと。」

隣の男の入った生体ポット？も取り込んだ。
そして、テレポーテーション

で、管理局のロストロゴニア保管庫では、
「最後に、この管理局の全ての魔力の無いロストロゴニアを貯つぞ。

魔力の無いロストロゴニアを、手当たり次第に取り込んだ。

そろそろ、

「まあ、戻るか。」

テレポーテーション

で、
「戻つて来ただぞ。」
『ー?』
だから、
「驚くな!!」
「いや、無理だから。」
トーレが言った。
「まあ、取り敢えず土産だ。」
生体ポット?を2つ出した。
『ー?』
にやつ、
「NO.2のドゥーハと騎士ゼストだ。」
「ドゥーハ姉さん・・・。」
おお、クアットロは泣いている。
「ドゥーハ・・・。」
他の人達も、泣いている。
「何で、ドゥーハを?」
ジエイルが聞いてきた。
「まあ、気分的にだ。ってか、娘だろ?」
で、
「だけど、なぜ騎士ゼストも?」
「まあ、一緒に有つたから。それだけ。」
で、

「ふん！」

掌から生体ポットに向かつてエネルギーを出した。

「何をするの！？」

クアットロが、つかみかかつて来た。

「ちゃんと、見る。」

『えつ！？』

ゴポゴポ

生体ポットの中で、裸のドゥーニストが苦しそうだった。

「よつと。」

念力で、

パリーン

「げほ、ごほ！？」

「はあはあ！？」

息が、出来なかつたからな。

でも、

「放心して無いで2人の服を用意しろ！？」

『あつ！？』

ビュツ

「動くの速つ！？」

流石、女子だ。

で、

「お前も、戻つて来い！」

ゴン！

「痛い！」

ジエイルを殴つた。

復活しろー！（後書き）

死者蘇生です。

・・・遊戯王のカードの、死者蘇生は持っていないけど。

逃げたり。
(前書き)

まあ、遅い更新です。

逃げてつと。

「初めまして、N.O.・2のドゥー工、騎士ゼスト。」

2人に挨拶した。

でも、

「聞いてないか・・・。」

他のナンバーズと抱き合って泣いてるし。

まあ、

「騎士ゼスト?」

「・・・また、改造した、」

「いや、違うから。」

ギロツ

「・・・お前は?」

「俺の名前は怪だ。」

ちょっと恐いな。

「じゃ、じゃあジョイル。後の事は頼む。」

「へつ?」

説明が面倒だ。

テレポーテーション

で、
ここは、クラナガンの近くの遺跡。

で、透明状態で、

「適当に、逃げてきたけど。」
これからどうしよう。

「・・・うん？」

ギガバトルナイザーに、反応有りか。
「まあ、行ってみるか。」

まだ、発掘されてない遺跡。

実は、管理局が把握できていない遺跡って他にも、山口山口有るらしい。

まあ、全世界のロストロギアの保管なんて無理だろうけど。
でも、

「普通、把握している筈なんだが?」

管理局の管理が甘いのか・・・。
にしても、何故?

反応が?

ロストロギアか?

で、

「怪獣は・・・あれか?」

円盤状態で攻撃中の、

「円盤龍のナースか?」「

ん?

近くで

「あれは・・・機動六課か?」

赤い髪のツインテールのツンデレのティアナ・ランスター、
青い髪のショートのスレートおバカのスバル・ナカジマ、
赤い髪のイケメンショタのエリオ・モンティアロ、
ピンクの髪のロリのキャロ・ルシイ、

隊長陣に、

モロボシ・ヒカリ、

「にしても、円盤状態のナースって、」
どうやって倒すんだ？

「龍の状態ならバラバラにできるが、」
円盤じゃあ、

「無理じゃあ？」

操っているのは誰だ？
見つけるか。

で、探していく、
見つけた。

「あれは、ケムール人だよな？」
ゼットン星人との違いが分からん。

でも、

持っているのは、

「遺跡のロストロギアか？」

なんかのエネルギー物質かな？

あれ？

「あれからも、怪獣の反応が？」
封印されているのか？

まあ、
見ているか。

逃げてつと。（後書き）

遅くなります。

いじるなるか……（前書き）

まあ、これです。

じになるか・・・。

さてと、
見てします。

え？

ナースとゼロの戦いを。

ドガーン

「ん？」

ナースが、バラバラになつて燃えていた。
殺されたか・・・。

まあ、

「回収。」

ギガバトルナイザーを起動させた。
そして、ナースは光になり、
ギガバトルナイザーに吸い込まれた。

まあ、でも。

「ゼロが、出てきてやつとか・・・。
弱いな。

リリカルなのは・・・。

魔法じやない化学の産物が勝てる訳無いか・・・。
え？

これは、魔法？

違うよ！！

正確には、超化学つていう物でファンタジーの魔法じやないよ！！

いや、本当。

魔法の源は、普通は魔法なんだけど、

この世界は、魔力素つて化学の産物らしいよ。

だから、

「ホラーやファンタジー系の怪獣を、ただ生物を改造したのと思つて樂に倒せると思つてゐるらしい・・・」

正直、言つて、

甘いぞ！！

拳大の砂糖を塊の状態で、食うのと変わらんぞ！！
化学で、解明できない怨霊とかの怪獣とか出てきたら多分全員が死ぬな。

特に、八神はやで！！

お前は、闇の書の怨みを甘く見ているな。

お前が、今の状態で居られるのは、ただ、主人公補正が有るからだ

！！

もし、主人公じゃあ無くなつたら・・・。

確實に・・・。

まあ、関係無いけど。

だが、

「さつきから、ケムール人が動いて無い。」

・・・おや？

「あれは、ワイルド星人？」

協力しているのか？

あいつらの目的は、

「ああ。人の体と生命か・・・」

どちらも、体が不自由な問題が有る奴等だ。

だが、

「なぜ、こんな遺跡に？」

あつ。

もう1体のナースを出した。

つてか、

あれつてナースの反応だったのか・・・。

まあ、どうせ誘拐をこの辺でしてゐたのだろう。

だから、起動六課が動いて調査してロストロギアか判断していたのか。

今は、こういう事になつてゐるけど。

じゃあ、

負けるのを待ちますか。

で、

「おい、早いな。」

もう、またバラバラかよ！！

しかも、倒された場所はケムール人とワイルド星人の居た場所。
あいつら、死んだな・・・。

でも、

「回収。」

ナースが、光になつてギガバトルナイザーに吸い込まれた。

でもつて、

「本気のウルトラ兄弟必殺光線！！」

フルパワー！！

『グワアアアアアアアアアア！？』

ゼロは、かなり飛ばされて、

ドガガーン

地面に体を打ちつけた。

おい、

「ちょっと、焦げてないか？」

少し、ゼロのカラータイマー辺りが焦げていた。

その時に、

「スター・ライト・ブレイカー！！」

桃色の砲撃が来た。

透明の状態だが、位置がバレたか・・・。
でも、

「所詮、この程度。」

砲撃の軌道を両手で、

フォワードの方へ変えた。

『きやああああああああー！？』

おっ、撃墜された。

ティアナと体長達以外は・・・。

「みんな！？」

で、

「くらえ！！」

「えつ？」

高町に、高速の光弾を放つた。
だが、

『グワアアアアアー！？』

ゼロが、体で高町を覆つて防いだ。

「ゼロ？」

高町が声をかけた。

そして、

ゼロは、光になり人の姿になつた。

だが、倒れている。

「最後の力を振り絞つてか・・・。

まあ、生きてるだろう。

光になつて消えてないし。

で、

テレポーテーション

で、アンダーグラウンドで、
「今は、食料の買い物中。
買つのを忘れてた。

で、

起動六課では、完全に透明の敵の対策を講じていた。

ヒカリは、ケガが原因で眠っている。

管理局は、透明の敵がジエイルの脱獄に関与、ロストロゴギアの盗難の犯人と断定した。

だが、指名手配は写真が無い為無理だった。

いなるか・・・（後書き）

軌道を変える事はできます。
レーザーとかですが・・・。

どちらかのー? (前書き)

まあ。

おわかのー？

で、

一面が、

白い部屋、

「じーは？」

確か、食料を買つてアジトへ帰る所だった筈？

「怪？」

うん？

田の前にでかい亀。。。

つて、

「亀？！？」

つて、

「なぜ、呼んだ？」

遊戯王の方には、出ていたのに？

こっちには、1回も出てこなかつたのに？

「ああ。最近、じつにじーは更新していなーからや。」

時間稼ぎ？

「まあな。」

「おいー？」

「いや、だつて、」

「だつて？」

「あまりにも、魔法少女が弱いから。」

「おいー！」

「気にしてる事を。。。「

「いないだらう？・強いのは。」

「」

「まあな。ウルトラマンも微妙だし。」

「まあ、怪獣の力は強力だし。」

「その気になれば、星も壊せるし。」

まあ、これは最終手段の自爆とかだが……。
「で、もう一つが注意だ。」

「注意？」

「ああ。これから行動だが、」

「行動……。」

「何だ？」

「ヴェロッサは、殺したのは別に構わん。」

いや、

「構わんの！？普通は、ダメだろう！？」

「原作キャラは、確かに殺したらいろいろ面倒だ。」

なら、

「何で、ヴェロッサは？」

「原作キャラでも、サブキャラは対して問題にならん。」

おいおい、

「だが、クロノは特例でダメだ。」

はあ？

「よく、アンチされているのに？」

「……アンチの理由を知つていてるか？」

「知らん。」

観たことが無いから。

「性格が気に入らないから。」

え？

「それだけ！？」

「ああ。ってか、それだけだ。」

「……酷いな。」

「まあ、正直酷いな。」

「だが、何でそれで……。」

「

「性格の事だが、普通は問題は無いのだが・・・。」「だが？」

「転生者はそれがいけない、って、」「確かに、頭が固いだつたけ？」「

「ああ。それだが、普通はそれが正しいのだが、」「だが？」

「真剣勝負に水を差すなつて事。」「

「・・・それだけ？」

「ああ。・・・はつきり言つて、クロノを殺すよりは原作主人公キヤラを殺したほうがいろいろと罪は軽いぞ。」「

「おいしいいいい！？」「

「俺、そんなに人を殺したく無いぞ！？」「

「まあ、殺しはさせはしない。」「

「もう、殺したくないぞ！！」「

つたく。

「だから、クロノには干渉するな。」「

「・・・分かつた。」「

「にしても、この世界なんかおかしいんだよなあ。」「

「・・・怪獣か？」「

「いや、この魔法少女リリカルなのはの世界 자체がさ。」「

「どういう事だ？」

「歪な機動六課、話が上手く進んでいく事が・・・」「

歪は分かるが、

「話？」

「ああ。あまりにも、上手く事が進んでいるんだ。」「

「どういう事だ？」

「魔法少女の良い方向に行き過ぎているんだ。」「

「例えば？」

「機動六課を作る事が、まず無理だ。」「

「・・・。」「

「それに、魔法少女が正しい、って事におかしい部分も有る。これは、少し洗脳に近いが・・・。」

「まあ、それは知つてゐるが、」

「あまりにも、魔法少女の都合の良い方向に行つてゐるんだ。」

それは、

「主人公補正?」

「行き過ぎてゐる氣もするが、多分な。」

「で、俺は?」

「まあ、下手に干渉するな。」

「・・・そうか。」

「まあ、会つ氣は無いけど。」

「じゃあ、用はこれだけだ。」

「そうか。」

「まあ、一応更新できるよつてあります。」

「ああ、頼むぞ。」

本当に・・・。

そして、俺は白い部屋から消えた。

まいかのー？（後書き）

まあ、これは本当です。

「飯を食べて」（前書き）

まあ、短いです。

「飯を食べて。

まあ、

「まさか、亀介が出てくるとはなあ。
つてか、更新久しぶりだなあ。

まあ、取り敢えず、

「アジトへ、戻ろう。」

「

で、

「戻つて来たぞ。」

ビクッ

だから、

「何で、 そう驚くんだ？」

『いきなり、過ぎるわ！！』

まあ、テレポーテーションだし。

で、

「さてと、まあ取り敢えずご飯だ。」

もう、夕方だし。

「あつ。じゃあ、私達が作ります。」

そう、ウーノが言った。

「じゃあ、頼むよ。ってか、作れたのか?」

「ああ、日本食が恋しかったからね。」

そう、ジェイルが言った。

「・・・なあ、もしかして、ジェイルとウーノって、

近くに、居たトレに聞いた。

「まあな。」

デキてますか。

そうですか。

リア充が!!

ブルッ

「なつ、何だ!?」

ジェイルは、怪から出た殺気に怯えた。

そして、他のメンバーとゼストがこっちを見た。

「いや、ちょっとリア充が!!って、殺氣を出しただけ。」

『そうですか。』

そして、納得した。

「何で、納得するの!?」

ジェイルは、突っ込んだ。

「だつてねえ。」

「そうですね。」

ドゥーエとクアットロは、

まあ、縁が無いって事で。

『ピクッ』

あつ、額に。

で、」飯を食べていて、

「まさか、」ううう日が来るとはな。」

ゼストが、言った。

「ジョイル達と、」飯とか食つた事が無かつたのか？子供の、ルーテシアが居るの。」

「警戒して、拒否されていたよ。まあ、騎士ゼストだけだがね。」

ジョイルが、言った。

「ちよつと、行ってくれるかい。」
で、

『また?』

「そういう事。」

テレビ・テーション

で、今は、
「墓地に、居ます。」

「飯を食べて」（後書き）

まあ、またです。

おお、 講評？（前書き）

まあ、 今回せ。

まあ、襲撃？

で、

墓地に来てつと、

お墓の前で、

エネルギーを送つて……、

いや、

「止めよう、ゲイズ中将を生き返らすのは、
この男には、帰る家族が居るが、

「確か、監視されている筈だよなあ。」

戦闘機人の事についての重要参考人だし。

・・・この男を、生き返らせても、

「どうやって、生活をさせよう？」

この男は、有名人だ。

いや、

「ゼストに、会わせたら良いな。」

確か、わだかまりが有る筈だ。

生活の事については、後で良いな。

そして、エネルギーを送りゲイズ中将の身体を復元させて持つて帰
つた。

精神と身体を分離させて、
「暴れてこよう」と。
夜のクラナガンに行った。

で、深夜に、

「はい、ゲイズ中将。」「え！？」
「の身体。……で、ゼストさんよお。ゲイズ中将と話がしたいだ
ろい？」
「……はあ？」「まあ、取り敢えず、
「……うん？ 儂は、一体？」
生き返らせた。
「じゃあ、後の事は任すから。」「いやいやいや！？」
何か、用があるかもしけんが寝る。
「お休み。」
そして、近くの部屋で眠った。

・・・なんか、ゼストとゲイズから泣き声が聞こえるが、知らん。

で、透明の状態。

さてと、機動六課近くの海で、

「どれで、暴れさせようかな？」

久しぶりに、

2、3体ぐらいを出そうかな？

まあ、取り敢えず、

「少し、遊んでやろうっと。」

手から光弾を何発か放った。

ドガガガッン

その辺から、火が上がった。

一応、宿舎じゃなくて演習場に使われているエリアに放ったから。

おおっ、何か火の近くが凍り始めた。

でも、

「まだまだ！！」

他の演習場にも、放つた。

でも、

ガガガガガツン

何か、別の光弾に相殺された。
つて、こっちにも来た！！

「おつと。」

でも、避けれ

「誰だ？」

あれは、確かティアナにヴィータだっけ？

なら、こっちは、

「お返しだ、ほらよ！！」

デスレムの隕石みたいなエネルギー弾を、空から降らせた。

ドガーン

流石に、相殺できずに被害が出てるな。

さてと、

「あいつら、光弾を出した所を攻撃したからまだ見えていないのか・
・・。」

だって、さつき居た場所に攻撃しているから。
まあ、良いや。

さて、

「いけ、ガゾート、テレスドン、ムルチ！！」

3体の怪獣を放つた。
しかも、

「強化しているよ。」

空に、ティガのガゾート。

演習場には、初代のテレスドン。

海には、ジャックのムルチ。

どれも、強化された怪獣だ。

さて、どうなるかな？

まあ、襲撃？（後書き）

暴れます。

暴れる。(前書き)

暴れる。

暴れる。

で、

これは、

遊んだ!!

八

この笑いは、遊戯王の方のしゃないが、

でも、

「今は、暴れろ！！」

卷之三

で、

魔導師は、意味が無いな。

エリオとキャロで娘のフレートで龍か
空でガントに攻撃しているが全然効いていない。

いるが、効いていない。

「トウマか・・・。」

だが、動きが遅いな。

まあ、傷を負つていいみたいだしな。

で、
おつ、

「ゼロになつたか。」

だが、

「思いつきり、遊ばれてるな。」

まあ、カラー・タイマーに集中して攻撃しているからだけど・・・。
教えたのは、俺だけね。

スラッガーは、受け止めたり弾いたりしている。

・・・そろそろ帰るか？
なんか、暇だし。
・・・うん？

ドガーン

何か、空から怪獣達に光の玉がぶつかつた。

「おい、手助けか。」

セブン、レオ、って、

「おい、師匠とか出てくるのかよ！？」

つてか、何で気づいたんだ！？

「・・・取り敢えず、お前らあいつらの相手をしりーーー。」

『ギャオオオオオオオオオオオオオオオオ！』

ゼロば、

「俺が殺る。ふん！！」

巨大化させた。

ちなみに、透明の状態。

—はあ—！」

なんか、回復魔法を緑色の服を着たシャマルから受けているゼロに、かなりの量の光弾をぶつけた。

ドツガガガガガガガン！！

卷之二

リナ充・・・殺

・・・これって、単なる嫉妬だなあ。

キイーン!!

卷之三

でも、

「テレホー テー シミン!!」

魔王の後ろから、

業火を放つた。

だが、

ギイーン

何かに、防がれた。

シート?

プロテクションだつけ？

・・・デバイスの判断か。
だが、服がほぼ焦げていた。

「バスター！！！」

「テレポーテーション！」

魔王がここに砲撃してきた

そして、テレホーテーリングで豊富な方は逃げた
あはかく、秀明の状態で口火を切ります。

で、

卷之三

セブン、レオに。

後ろからぶつけた。

いきなりの攻撃にびっくりしたのか?

にしても、

まさか 接触とはなあ

これが、経験の違いか。
・・・。

取り敢えず、

一
戻るか

キガバトルナイサーに、怪獣達を戻した。

「待て！！」

セブンが、こっちに声をかけた。
見えない筈だが・・・。

「お前は、レイオニクスか？」

それは、レイオニクスバトルがこのミッドチルダで起つてこいつで
事か？

で、その質問は、

「ああ。」

多分だと、思うが。
テレポーテーション

で、

「まだ、暴れる。」

今は、森の方。

暴れる。（後書き）

まだ、暴れる。

暴れねえ。(前書き)

短い・・・。

暴れねえ。

で、
「山に来た。」
せとと、

「何をしようかな?」ニヤツ

その時の笑顔は、ジャンプで連載中の漫画のトロロの敵キャラで、
美食會の笑顔を想像する程に歪んでいた・・・。

「お前が、書いてるんだろうが!?」

と、怪は空に向かってツツコンだ。

「ちつ、遊戯王と違つてこっちには干渉しないのか・・・。
一人で呴いた。

で、
「どうしようかな?
こんな山では、目立たない・・・。
アジトに戻らうか?
・・・いや、

「クラナガンに行こう。」
テレビ・ティー・ション

で、

クラナガンの空中で、
透明の状態で浮遊しています。

「・・・どうしようかな?」

あっちの海の方が、機動六課。

今は、それより市街地の位置に居る。
恐らく機動六課は出てこれないな。

さつき、暴れただし。

ちなみに、今は夜の10時。

・・・レイオニクスバトルが、有るって言つてゐる様な事を言つて
いたな。

そういうや、

「でも、あれはこっちの勘違いの可能性がある。」

まあ、レイオニクスバトルにはあまり興味が無いけど。
にしても、

「どうしよう、俺は目立たないと面白いと思わないなあ。特に、市
街地で怪獣が暴れるのが良いな。」

まあ、それが特撮の売りでも有るんだと思つがな。

で、

やつぱ、帰つて寝ようか。

「あまり動けないな。」

「この後は、

「まあ、ゼロは師匠も出てきたから強くなるだりつな。」

・・・面倒だな。

「じゃあ、戻るか。」

テレビテーション

暴れねえ。(後書き)

は
あ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5080v/>

怪獣対魔法少女リリカルなのは&ウルトラマンゼロ

2011年10月9日09時04分発行